

14. エジプト・スエズ地区の日本人駐在員に発生した 肝炎について

久満薫樹, 林 直諒, 小幡 裕
(東京女子医科大学消化器病センター)

1976年8月から1977年2月までに、スエズ運河拡張工事に従事する日本人従業員約200名の中から7名の急性肝炎患者が散発した。発熱・消化器症状・黄疸などA型肝炎に特徴的所見を呈し、6例が20歳台、1例が30歳台で、生検像は急性ウイルス肝炎であった。病初期と治癒期でHA抗体価の差を認め、A型肝炎と診断される。衛生環境改善によりその後の発生を予防しえた。海外渡航者の増加する今日、疫学上のモデルになり得るだろう。

15. HBsAg 持続陽性者における e 抗原・e 抗体の臨床的意義

岩間章介 (千葉労災)
鈴木紀彰, 中嶋征男 (千大)

HBsAg 持続陽性者107名及び急性B型肝炎9名について、HBeAg・HBeAbの測定をおこなった。急性例では、HBeAg陽性者0名、HBeAb陽性者4名で、HBeAbは発症後約1カ月経過した時点であった。持続陽性例では、HBeAgはCAHで56%に認められ、CIH, AsC, 肝硬変, HCCではHBeAbの頻度が高かった。肝機能検査ではHBeAg陽性例にGOT, GPT, TTTが高い傾向が示された。以上より、HBeAgは、肝炎の活動性と密接な関連を有する事が示唆された。

16. 悪急性肝炎を疑わせた1症例

○石田 裕, 小博規覚, 中野泰雄
永瀬敏行

(船橋中央)
税所宏光 (千大)

48歳女性。輸血歴なし。＜主訴＞食欲不振、嘔気、黄疸＜検査＞GOT 404, GPT 217, LDH 798, T. Bil 8.7, HB-Ag(+)より急性肝炎の診断であった。しかし、入院時徐々に黄疸強度となり約3カ月持続(最高T. Bil 32.4)、トランスアミナーゼとビリルビンの解離、腹水の出現、経過中に一時みられた意識障害などの臨床所見より、肝生検は行っていないが、亜急性肝炎を疑った1例を示した。

17. パンチ症候群の1例

飯田真司, 青木 元 (上都賀総合)

脾腫・貧血・門脈圧亢進を示し、組織上、肝臓にごく軽度の線維化を認める、いわゆる特発性門脈圧亢進症の1例を呈示し、臨床的には、一般血液検査、理学的所見、肝脾スキャンングといった、簡単で、負担の少ない検査が本症を疑わせるに十分役立つことをのべた。

18. 腹水濃縮灌流の1例

河端順子, 田口忠男, 岩間章介
木内夏生, 加藤繁夫, 石原運雄
(千葉労災)

難治性腹水となった肝硬変症に対し、腹水濃縮灌流を施行した。腹水濃縮灌流により、腹水5800ml排出し、点滴を含め1250mlの濃縮腹水を静脈内に再注入した。この時蛋白の回収率は81.4%であった。灌流により腹水減少、自覚症の改善みられたが、その後、高アンモニア血症及び前昏睡をきたし、腹水再貯留を認めた。この症例に関しては、灌流の効果が、はっきりしなかった。

19. 消化器疾患その他における Carcinoembryonic antigen (CEA) の臨床的意義

○檜山義明, 横須賀収, 三輪清三
(君津中央)
鈴木紀彰, 岩間章介, 飯田真司
(千大)

腫瘍性疾患85例、非腫瘍性疾患80例、その他35例、計200例についてCEA RIAキットを用いて測定した。腫瘍性疾患では47%の陽性率で、大腸・直腸・胆管・胃・肝の順で陽性を示した。非腫瘍性疾患では15%の陽性率であり、肝硬変、胆石症で陽性を示した。原発性肝癌と転移性肝癌の鑑別診断で、前者ではCEA値5ng/ml以下、後者では、AFP値はすべて100ng/ml以下であった。胆石症では高度炎症、高度黄疸時にCEAの軽度増加が認められた。

20. 超音波リニア電子スキャナーによる脾の診断法

唐沢英偉, 三木 亮, 上野高次
(国立横浜東)

超音波リニア電子スキャンを用い、脾の描出法に若干の改良を加え脾の描出率を検討した。対象、脾疾患を除く21例。方法、前夜、下剤、マグコロール250mlを投与。当日朝絶食、コリオパン1A筋注後、500mlの水を飲用。主に右側臥位、左側臥位にて検査を行う。結果、

脾頭部の描出率は47.6%, 体部は80.9%, 尾部は, 23.8%であった。本法により, 脾の描出率に有意の改善がみられた。

21. 急性閉塞性化膿性胆管炎の1例

松谷正一, 石田 裕, 小博規寛
中野泰雄, 永瀬敏行

(船橋中央)

大久保春男(同・病理)

胆管癌に合併した急性閉塞性化膿性胆管炎の1例を報告し重症胆管炎の問題点につき若干の考察を加えた。患者は黄疸を主訴とした69歳の女性で, 重症胆管炎の診断のもとに経皮的胆汁ドレナージを施行したが細菌性ショックにより死亡し, 剖検にて総胆管癌を併うことを確認した。次に重症胆管炎の名称, 概念の問題点を指摘し, その治療成績から早期の膿性胆汁ドレナージの有効性を確認した。

22. 病変の進行を長期にわたり観察した肝内胆石症の1例

与儀 裕, 有賀 光, 佐藤重明
河内文雄

(川鉄)

本症例は36歳の男性で13年間にわたり右季肋部痛・発熱・黄疸の症状で入院をくり返している。胆のう胆石症として2度手術を受け胆のう内に胆石が認められたが, その後も症状が持続し, 4回目の入院時に PTC で肝内胆石症と診断され, その病態が初めて明らかにされた。その後経過観察中であつたが, 今回入院時には肝内外胆管に胆石が充満していた。肝内胆石症は胆管像に多彩な変化を示すので詳細な読影がその診断に必要である。

23. 当院における胆石症術後後遺症の検討

浅田 学, 寺田洋臣(旭中央)

胆道直接造影法, 術中胆道精査法の進歩にもかかわらず, 胆石遺残例は少なくないと言われている。我々が, 最近5年間に経験した胆石症は, 643例である。この間, PTC, ERCP を600余例に施行, 胆石術後後遺症37例(胆管胆石21例, 肝内胆石13例, 術後狭窄3例)を経験。これらに関し, 再発症状, 再発までの期間, 前回手術術式との関係等を検討, 示唆に富むと思われる6症例を呈示, 若干の考察を加えた。

24. 閉塞性黄疸の2例

○篠塚正彦, 青木 元(上都賀)

PTC の普及と読影法の確立により, 閉塞性黄疸の診断は容易になった。私は閉塞性黄疸の2症例を受け持ち, これらに対しては PTC は持術的にも簡単であり, 患者の負担も少なく, 診断的価値が非常に高いことを経験した。症例1は肝門部胆管癌であり, 早い時期に診断がついたが部位的に切除不能であり, 減黄術を行なった。症例2は転移性肝癌を疑っていたが, PTC により脾頭部癌と分かり重複癌であった。

25. 胆管像にて診断困難であつた胆のう癌の2例

朝比奈信武, 宮城三津夫, 宮城和彦
(県立東金)

平野和哉, 大久保恵司(同・外科)

本院における, 診断困難であつた2例の胆のう癌について報告する。第1例は58歳の女性で, DIC, PTC にて総胆管の陰影欠損を認め, 胆管癌を疑い, 腹部血管造影を施行した。その結果, 胆のう動脈の不整, 血管の増生を認め, 胆のう癌と診断した。第2例は64歳の女性で, DIC, PTC で胆のうは造影されず, 総胆管は合流部を中心に, 著明な狭窄像を認め, 胆のう癌を強く疑い, 開腹した。組織診断は腺癌であつた。術後6年目までなお生存中である。

26. 膨大部癌の1手術例

北沢栄次, 新田義明, 町井 彰
(都立豊島)

唐木一守(同・外科)

症例57歳, 女性, 主訴黄疸, 現病歴昭和52年5月10日尿の濃染, 瘙痒感, 5月20日眼球の黄染, 6月3日入院。現症黄疸(+), 右季肋部に鶏卵大の胆のう。検査成績 MG 50, ALP 428, GOT 174, GPT 224, α -Fetoprotein(-), HDG で乳頭部に一致し二重輪郭像 PTC で肝内, 総胆管の拡張, 末端部の糸状の細まり, 7月6日脾頭十二指腸切除術施行, 腫瘍は一部潰瘍を伴う2.0×1.5cm, リンパ節浸潤(-)組織学的に管状腺癌, 術後は経過良好だったが, 腹水貯留, 下血がみられ, 術後6カ月で死亡。

27. 当院における胃X線診断の改良

隆 元英, 大串晴夫(上都賀総合)

胃X線検査は胃癌殊に早期癌の拾い上げ診断として重